

日々の学習をキャリア教育の視点から ～進路選択につながる力を育む～

「進路選択」と聞くと、学年が小さいほど遠い出来事を感じ、卒業が近くなるにつれて、より具体的に考えるようになっていくと思います。卒業までに身に付けた様々なスキルを総合して進路選択をしていくこととなりますが、今回は、“選択”する力を育むために、幼少期からできることについて考えてみます。

身近な選択する活動として、「食べたいものを選ぶ」ことを例に挙げたいと思います。学校では、給食や校外学習の昼食選びなどが例に挙げられるでしょう。御家庭では、お菓子や食事を選ぶことなどが考えられます。まず、選ぶためには、食べ物についてよく知ることが必要です。好きなものを何度も口にして、何度も名前を聞いて、その食べ物と名前が一致していきます。給食では、食べる前に教師が料理や食材の名前を伝えています。「どっちがいい？」と聞かれたときに、名前を聞いたりその物を触ったりして、味や自分の好みだったかどうかがイメージできるからこそ、選択できるようになっていきます。

また、包装されているものや果物など皮がついているものは、その形状も知る必要があります。中身しか知らなければ、包装されたものや皮付きのものからはほしいものが探せません。包装されたまま、皮がついたまま触って、そしてどのように開ける(剥く)と中から好きなものが出てくるか知っていることが大切です。

ここまでよく知ることについて話してきましたが、それだけでは十分ではありません。「どっちがいい?」「何が食べたい?」など、子どもの意見を聞いてくれる人が必要です。始めのうちは、選び間違える子もありますが、続けるうちにほしいものを選べるようになっていきます。

御家庭でも食べ物やお菓子を選ぶような些細なことから、何をして過ごしたいのか、どうしたいのかなど、物事を経験してよく知ることや、お子様の意見や気持ちを聞く機会を設けていただくと、選択する機会が増え、より確かな力になっていくと思います。物事をよく知り、自分の考えを伝えること。その積み重ねが、将来、自分がどうしたいのかを考えていくための礎となります。

